

## 題目:災害により生活基盤を失った被災者の人生の再構築に影響を及ぼす要因

～発災から5年間の経時的変化に伴う要因の特徴～

保健医療学専攻・看護学分野・看護管理政策学領域

氏名:末永陽子

キーワード:災害,被災者,人生の再構築,経時的変化,影響要因

### I. 研究の背景と目的

日本における近年の災害は、地震災害に伴った津波・原発事故や水害に伴う土砂崩れが併発するなど、複合した被害により、被害の拡大・長期化が起きている。更に、被災者が生活する地域社会の構造は大きく変化している。これまで既存の社会サポートシステムとして存在していたコミュニティのあり方も変化しており、医療支援を軸とした既存の災害看護の枠組みを用いた支援だけでは十分とは言い難い。災害によって予期せぬ変化が生じた被災者の人間的復興を目指した災害看護の変革が必要である。

そこで、本研究の目的は、東日本大震災による予期せぬ生活の基盤の喪失によって人生に変化が生じた被災者を対象とし、人生の再構築に影響を与える要因を明らかにすることであった。被災者の体験を通して明らかになった知見をもとに調査項目を作成し、人生の再構築に影響をおよぼす要因の経時的特徴を明らかにした。

### II. 研究1

**研究目的:** インタビュー調査により災害における被災者の人生の再構築の影響要因を明らかにする。

**研究デザイン:** 質的帰納的研究デザイン **調査期間:** 平成28年10月30日～平成29年11月30日

**研究対象者:** 2011年東日本大震災において、住居・もしくは社会生活基盤が揺るがされた体験をし、現在新たな生活を再構築している、発災時30歳～70歳で協力が得られた8名。

**調査方法:** 人生を再構築するうえで影響を及ぼした事柄について自由に語ってもらった。

**倫理上の配慮:** 本研究は、国際医療福祉大学の研究倫理審査の承認を得て実施した(許可番号16-Ifh-060)。

**分析方法:** 得られたデータは逐語録に記述し、被災後の人生の再構築のプロセスを辿る中で〈気づき〉×〈価値観の変容〉×〈行動変容〉を表す部分を抽出し、コード化・カテゴリー化した。さらにこれらについて多面的な視点で捉えられているか質的研究の専門家よりスーパーバイズを受け、確認した。

**結果:** 本研究の対象者は、発災時、30～60歳代であった。津波による家族の喪失(2名)、津波による家屋の喪失(4名)、地震による家屋の全壊・半壊(3名)、仕事場の喪失(2名)を経験していた。インタビューの結果、被災者の人生の再構築に影響を及ぼす要因として、73の「コード」から、22の《サブカテゴリー》、【生活を営む基盤】【身体健康】【日常の支え】【支援者の存在】【災害への思い】の5つのカテゴリーが抽出された。

**考察:** 《家族の存在》や《近隣者》《地域の間人関係》《趣味》《生きがい》は被災した人々の【日常の支え】であった。また、《健康》《身体への負担》《睡眠の充足》《医療の充足》が【身体健康】を支えていた。《災害への恐怖》《肉親の死》《災害への備え》という【災害への思い】の中でも、「思い出すことへの恐怖」「生死にかかわる体験」「悲しんでも戻ってこない虚無感」という負の感情は、人生の再構築へ向けて被災者が受け止めざるを得ない現実であった。一方、「失った家族の代行への使命感」「避難生活を役立てたい」という語りもあった。時間が経過することによって負の感情から肯定的な感情へと変化を見せていた。被災によって《住宅の有無》や《仕事の存在》《経済的支え》である【生活を営む基盤】は被災状況によって異なり、《生活の場の変化》によって《プライバシー》が保たれるよう《自宅の再建資金》や《収入》を整えていた。さらに、《支援の情報》を得つつ、《ボランティア》や《悩みの相談者》である【支援者の存在】に支えられていた。

**結論:** 突然の災害による予期せぬ生活基盤の喪失によって人生に変化が生じた8名の被災者の語りは、被災の状況により異なり、また経時的にも変化しており、研究2「被災者の人生の再構築の特徴」の質問項目として応用が可能なものとして確認できた。

### Ⅲ. 研究2

**研究目的：**災害における被災者が人生の再構築に影響を及ぼす要因の経時的特徴を明らかにする。

**研究デザイン：**質問紙による量的研究

**対象者：**2011年東日本大震災の被災地にある行政機関/商工会議所に所属している企業で本調査に同意が得られた91施設に調査を依頼し、発災時30歳～70歳であった被災者、合計487名を調査対象者とした。

**調査内容：**質問紙の作成は、【研究1】のインタビュー調査の結果から抽出された22の影響要因に基づいて作成した。災害は時間経過と共に必要な支援が異なるため、各時期に必要な支援を明らかにすることが必要である。そこで被災者の人生の再構築に影響を与える要因について発災～半年、発災後半年～3年、発災後3年～5年の3区分で回答を求めよう作成した。質問紙の信頼性を確保するために、災害看護を専門とする研究者3名からスーパーバイズを受け、5名の被災者にパイロットテストを実施し、質問項目の洗練化を図り、影響要因を17項目とした。**調査期間**は、平成30年3月1日～令和2年4月30日であった。

**倫理上の配慮：**本研究は、国際医療福祉大学の研究倫理審査の承認を得て実施した（許可番号18-Ifh-056）。

**分析方法：**データの項目分析、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、その結果を観測変数とした共分散構造分析を行い、発災～半年、発災後半年～3年、発災後3年～5年の3つの時期における被災者の人生の再構築モデルを作成した。また、因子分析によって得られた影響要因の信頼性を確認した。

**結果及び考察：**調査票未完了者14名を除く302名を有効回答者とし、「再構築ができた」「ほぼできた」と回答した253名（男性175名、女性78名）を分析対象とした。

発災～半年は【生きるための基盤】【ソーシャルサポート】【内なる安寧】【自分らしさの希求】の4因子(Cronbach's  $\alpha$ :0.722～0.779)であり、モデル適合度：GFI=0.968, AGFI=0.943, CFI=0.938, RMSEA=0.047であった。この時期の特徴は【生きるための基盤】が【自分らしさの希求】に最も強い影響を及ぼしていることである。震災による甚大な被害によって行政機能・社会機能が著しく低下したことが影響し【生きるための基盤】の脆弱さや再構築の困難さを認識したことが、【自分らしさの希求】をより強く渴望させたことがうかがえた。

発災半年後～3年は、【心身の安寧】【ソーシャルサポート】【生きる糧】【生活再建】の4因子(Cronbach's  $\alpha$ :0.601～0.825)であり、モデル適合度：GFI=0.966, AGFI=0.931, CFI=0.930, RMSEA=0.059であった。この時期の特徴は、【心身の安寧】が【ソーシャルサポート】に最も強い影響を及ぼしていることである。避難所から仮設住宅に移行し、コミュニティの再形成が求められることが影響していると考えられる。

発災3年～5年は、【内なる安寧】【ソーシャルサポート】【生活の安寧】【自分らしさの希求】の4因子(Cronbach's  $\alpha$ :0.742～0.809)であり、モデル適合度：GFI=0.969, AGFI=0.936, CFI=0.959, RMSEA=0.054であった。この時期の特徴は、【自分らしさの希求】が【生活の安寧】に強く影響していることである。復興創成期の最終段階として住宅再建・復興まちづくりに焦点が当たる時期であることより、【自分らしさの希求】に示される自己概念の再構成を求める心理と新たな調和としての【生活の安寧】を求める被災者の強い認識を示す結果となったことがうかがえた。

**結論：**モデルの特徴は3つの時期で異なっていた。経時変化に対応した支援の必要性が示唆された。

### Ⅳ. 本研究の限界と課題

本研究は、発災から5年から8年が経過した災害を対象に人生の再構築ができたと認識した30歳～60歳の被災者を対象とした研究であり、再構築ができていないと認識している被災者や小児・高齢者は含まれていない。今後、被災者が健全な人生の再構築が出来るよう支援を普遍化することが必要である。

### Ⅴ. 結語

突然の災害による予期せぬ生活基盤の喪失によって人生に変化が生じた8名の被災者の語りを基に作成した質問項目を用い、発災から5年間の経時変化に伴う人生の再構築に及ぼす要因について調査した。分析対象者は253名であった。発災から発災半年の特徴は、【生きるための基盤】の脆弱さや再構築の困難さの認識が、【自分らしさの希求】をより強く渴望させることであり、発災半年から発災3年の特徴は、【心身の安寧】が情報や人的交流など【ソーシャルサポート】を求める行動や認識につながることであった。発災3年から発災5年の特徴は、【自分らしさの希求】は自己概念の再構成を求める心理であり、そのために環境との相互作用において新たな調和としての【生活の安寧】をもとめる被災者の強い認識を示すことであった。